ことばのしつけ

広島大学教授
文学博士
藤原与一

○コトバのはたらきは心のはたらき

人間はことばをつかって生活する。この世の生活はことばの生活である。

私どもはいろいろの活動をいとなむ。これはみなことばをつかってやっている。人間が文化をうみ出す。文化は言語にささえられている。

思うことも感ずることも、みなことばがこれをあらわす。「言うに言われぬ」と言う。言われないことはない。「言われぬ」と言っている。あるしくじりことばについて、「ついこころにもないことを申しまして」と言う。ではそれは、ことばだけひとりあるきしたのか。そうではない。それは、心にもないことを言うような心にあったのである。その時のうかつな心そのままが表現されて、内外一致、そのしくじりことばになったのである。

私どもが、何か思うことを言おうとして、どうもうまく(思いどおりに)言いあらわせぬ場合を考えてみるとよい。いかにももどかしい。それを、何とか努力するうちに、ほぼ思いどおりに言いあらわせた時のうれしさ。——心とことばとは一つである。

すっと言えた時は、むねがすっとする。どつどつと言いな

やんだ時は、いつまでもむねがいたむ。おもしろくない。言いすぎて後悔することがある。あれば、ことばが、よい心をおいてきぼりにして先走りしたのをみずからくやむのである。たしかに、コトバのはたらきは心のはたらきと一枚であるのがほんとうのようである。

このような「ことば」、「ことばの生活」を指導する『ことばの教育』は、まさに『精神の教育』と言うべきであろう。ことばを教育するのではあっても、そのことが、精神の教育になる。心・思考感動の教育になる。

「しつけ」とはどういうものであろうか。しつけがただに外形のしつけにとどまるならば、ねうちのないことである。もとより形が大切である。が、形のしつけが、よく、人間の中みにまでとどくのでなかったら、しつけも、生きたしつけとはならない。いつの世にもしつけが必要であると思う。たんれんは重要であると思う。ただそれが、理をふんだたんれんとなり、中みにとどくしつけとなることが大事である。理をふめば、どんなしつけも、あたたかい人間教育となる。ことばのしつけもまた、精神の教育として、あたたかい人間教育にならなくてはならない。

○思考感動の方法とことばづかい

私どもは、ものを考えものに感じて、知識技能をみがく。言いかえれば、考えとりつつ、感じとりつつ、人間の実質を高めていく。

日本人には日本人の、考えかた感じかたというものがあるにちがいない。それは、世界の他国人たちの精神活動と同じものではあるまい。こんなことについては、すでに多くのことが言われている。「西洋人の論理性と日本人の論理性とは異質的だ。」などとも言われる。たしかに 西洋の文明と日本の文明とには、性質上の大きなちがいがあろう。西洋が理の文明であれば、日本は情の文明でもあるか。西洋の自然科学が異常な進歩を示したのも、言ってみれば、理の勝利である。今の西洋文明は、その自然科学の発達におうところが多い。

彼を思い、我を思えば、日本人に、その思考感動の方法の、新しいたんれん、もしくは自覚のたんれんがいることは、明らかであろう。世界の中に立って、私どもが、世界の文明と平和に貢献しようとする時、ありきたりの能力のままでよいということはない。いや、今は、歩度を早めて前進しないと、世界の進運におっつけない状態なのではないか。まことに、世界の学問と生活と文化とは、日進月歩である。私どもも、日々に新でなくてはならない。

彼の特質と我の特質と、どちらがすぐれているかという議

論は、今、必要としない。我はしょせん我でしかない。どんな場合にも、我をみがくよりほかに我をのばす方法はない。我をみがくにつけては、目の前の他例を見つめることに怠惰であってはならない。さしづめ、西洋の『理』の精神が、大きな目標になる。

考えてみると、私どもの今までの生活では、『理』の精神がよわかった。理を求め、理によってものを考えることが、今もなおよわい。生活の科学化などということが、なかなか徹底しない。科学者という人、かならずしも、その生活が科学的ではない。

今日は、『理』の教育の緊要な時であると思う。かつこれは、いつの世にも大事なことであるにちがいない。理を通すことによって情はおとろえるか。かえってよく生きると思う。私どもには、情にも理を通す心がけがいると思う。

このような『理』のたんれんが、ここに言う、思考感動の方法の新しい（自覚の）たんれんである。これには、教育が、理の教育として、あらゆる方法をつくすべきであろう。「ことばの教育」もまた、そこに一つの役わりをはたすべきものである。

国語教育を国語教育として研究する者の立場から言えば、ことばの教育こそ、ことばの精神教育として、よく、理のたんれんにかかわることができるもののように思う。むろん、すべての立場の人が、おのおのその立場から、理の教育の成功を確信するようであってもらいたい。国語教育のがわもまた、一つの地位において、その能事を自認するのである。

思考感動の方法は、ものの言いあらわしかたと一致する。ここに、言語の表現法というものが、大きくうかびあがってくる。ことばづかいである。日本人は日本語によってものを考え感じ、日本語によって言いあらわす。日本人の思考感動の方法は、日本語の表現法と一致したものである。ところで、今、日本人の思考感動の方法を、理的にたんれんしていくべきだとすれば、日本語の表現法を理的にたんれんしていくべきことになる。

それには、日本語の表現法を、現代西洋語などの表現法とくらべてみることが、有意義な方法となる。

現代日本語の表現法は、理的にたんれんしていくとして、どのようにたんれんしていったらよいものであろうか。

児童の言語生活を指導することに即して考えていこう。

○ことばのしつけ

一　話しても書いても、一文の長さを、なるべく短くさせることが、大事な言語教育即精神教育になると思う。一文が長くなると、とかく、理が通りにくくなる。短く言い切れ

ば、そこで区切りがつくから、言っていること（述べていること）が自分にもなっとくされる。——じつはたいてい、なっとくしないで言っているものである。はなはだしい時になると、もののはずみ・時の調子で言っている。ことばの摩術にひきずられるのである。これではいけない。まず区切りをよくする。まができると、自然にひとつ考える。したがって、つぎのことばも穏当に出す。結局、理が通ることになる。発表のあたまをつねに整理することにつとめなくてはならない。それには、日本語の場合、長くなろうとするセンテンスを、できるかぎり、短くすることにほねをおるのがよい。

なぜ、日本語のセンテンスが、ともすれば長くなりやすいのか。「そういうことは、ないと思いますがどうでしょうかねえ。」というように、とかく文表現があとあとできまる。現代英語だと、I do not …などとあって、ことは早くもきまるが、こちらの表現では、そういかない。表現のきめことばは、あとへあとへとしりぞくありさまである。いきおい、センテンスが長くなりやすい。

表現は、ぴしぴしときめていくのが、理をのばす道である。とすると、センテンスのきめ手を、なるべく早くよぶことに心を用いるのがよいことになる。

事がらによっては、センテンスが長くなるのが当然ということもあろう。そのような時は、大事な内容から順々に早く出すことにつとめるようにさせる。すると、実質的には、短文を要領よくつみかさねたのに等しくなる。これでよい。かって私どもは、外国文を邦訳しようとして、あとの方からひっくりかえることをした。それを先生が、あたまから順々に訳し下して、判然と、内容を分析して示して下さったことがある。近来の新聞の文表現は、内容の表示のしかたに、いろいろと苦心している。

児童の発表のことばが、センテンスとしてしまりのつかぬものになったら(なりかけたら)、もう一ぺん、はじめからやり直すことにさせるのもよい。やり直したくなるような習慣、やり直さないではいられない気もちがほしい。やり直させたら、センテンスを短くするむすびかたにほねをおらせる。「何々して。」に終ってもよい。おわらせることができるものなら、そんなところでも、とにかく一つ切らせる。形の不完全とも言える文ではあっても、そこでセンテンス表現がおわったことにさせる。おわった気もちにさせる。その気分のうえで、つぎのことばを用意させるのである。

センテンスをやり直させれば、その人は、センテンスの左右のゆれを、適当にふせごうとするこころになる。左右のゆれが平均化され調和されれば、重心は垂直におちる。これで理が通る。理の表現が完成する。

二　修飾語をおさえて、出しおしむことにさせる。理を通す思考のためには、夾雑物のないのがよい。簡潔ということが、的確のもとである。多く言えばあやしくなる。「ハイ。」「イイエ。」ほどはっきりしたことはない。人の答の、時に何とあいまいであることか。理の表現のためには、事実に即して、修飾語を正しく処理することが大事である。今日はとかく修飾過剰である。「たいへん」や「非常に」、「絶対」、「とっても」などは、もうその効能もすりへっている。広告・宣伝の文句は、いたずらに生活をわずらわしくしている。必要な修飾語だけがほしいものである。

修飾語をつかいすぎるから、センテンスが長くなる。「いったい」とかいうのは、ことにやっかいである。これによって、あとはかぎりもなく長くなることがある。

修飾のことばをつかう時は、その修飾目的を、はっきりと自覚していなくてはならない。この修飾語はこのことばにかけていくのだというようにである。母おやが、「早くさわがないでお行きなさい。」と言う。「早く」が「さわが」にかかる……からおかしい。あわててものを言うとこうなる。激情にかられた時はこれが多い。本来、修飾語は大事なことばである。大切につかって、いつも効果を確実にあげたいものである。が、つかい場所をあやまると、これくらいあわれなものはない。そのもの自体がすぐに死ぬ。

修飾語を無難につかうためには、これを被修飾部分にくっつけてつかうつもりになるのがよい。ひきはなすと、あやしくなる。表現のあやしい時は、自然にこれがはなれている。さきの「いったい」とか、また「だいたい」「およそ」とかは、すぐにくっつけて言っても、どこへくっつけるのかはっきりしないから難物である。

冗舌と修飾とは、あいともなう。私など、自分のことを反省してみて、感にたえない。子の親として、ことばで子どもを教育しようとして、多くしゃべり、多く修飾する。いかにもみだれたことばである。せっかくの発言も、無力におわる。発言と修飾との『理』がほしい。子を思う親の情愛にはもえながら、有効なことばをととのえるのに冷静でないのは矛盾である。一人の教師として私などは、また冗舌である。後悔しては、よく、せめてもあの三分の二ぐらいの分量のことばに話せたらなどと思う。ことばが多くて修飾がはびこり、修飾がはびこって理がみだれる。あるいは不鮮明になる。

むだなくりかえしがおこなわれるのも、一種の機械的修飾である。私などは、いろいろのくせで、くりかえしが多すぎる。時にそれは、論理を緻密になどとの用意にもとづくこともあるけれど、概してくどい。くどくて、一つの大事なことの印象づけをあわくする。里程標を一本々々打ち立てていくように、大事なことばをきっかりとすえつけていけぬもの

か。里程標の間には修飾はない。そして里程標は、私どもを、つぎからつぎへと、確実に、それこそ道理を以てみちびく。

三　主語（主部）と述語（述部）との対応のはっきりした言いかたになれさせる。主語の「省略」は、日本語表現法について、早くからよく言われることである。省略というが、これは、単純に省略とは言えないものである。それはまず、省略ともしておこう。このような省略は、つねに主部をおくようにすればよいかというのに、そうとばかりもいかない。おくにもおよばないことも多い。ここでは、結局、主述関係をつよく意識する習慣をつけるのがよいということになろう。何に対してどう言う、という心を持つことである。主語なるものを、ことばのおもてに出さなくてもよい。陰在のその主体を意識して、はっきりと、述部の敍述をしていくようにさせる。何に対して、こう言うのか、と、いつも自問するように習慣づければよいと思う。表現すべきことを、主と賓とに分析してとらえれば、適度に緊張した文表現をうむことができる。センテンスの長さも、法外に長くはならない。長くなっても、重心のくるうようなことはない。よくある例に、「私は、……」と言いはじめて、終がいっこう「私は」でないことがある。これなどは、「私は」の意識そのものがあいまいなのだろう。「私は」のかまえを、ほんものにしなくてはならない。

主述関係の意識を立てさせることは、文章を読ませる作業にも、話を聞かせる作業にも適用してよかろう。文章面を見て、個々のセンテンスにつき、それを、主述関係のしっかりとしたものにまとめとるようにさせる。話を聞く時にも、「主述」「主述」と論理を追うていくようにさせる。

四　センテンスのしめあげかたとして、断定の表現になれさせることが大切であると思う。

これはただに大まかに断定におもむかせようとする指導ではない。本旨は、単純率直にものを考えさせ感じさせようというところにある。まっすぐに考えてまっすぐに表現することが大切である。まっすぐな表現は、おのずから修飾語を不要としよう。主述の関係もはっきりとしていよう。自然、簡明な表現におちつく。長くはならない。ここに、「すなおさ」の教育が大切である。すなおということは、科学的ということであると思う。科学的思考が、しずかな断定の表現になる。

断定になれさせることは容易でない。まず、断定がおそろしくならねばなるまい。断定がおそろしくなって、だんだんに、ことばがわかってくる。あるいは、ことばがだんだんに

見えてきて、断定がおそろしくなる。こうして、ことばにとりくむ。一語々々が判別の対象になる。ようやくにして、本格的な断定にくる。おのずから、すっくと立ったセンテンスにならないではいない。

以上はもっぱら一センテンスだけにかぎってのことであった。つぎには、このようなセンテンスをいくつもつらねていく場合のことが考えられる。

五　文をつぎつぎにつづけながら文章を作っていく場合、接続詞が、かんじんのつづけ役になる。私どもの思考感動は、文から文へとのびていく。この発展を要所でささえるのが接続詞である。「しかし」と「そして」の二つを考えてみてもよい。つぎの文が、「しかし」の下に開けるか、「そして」の下に開けるかで、文章のふれは大いにちがってくる。接続詞は、思考展開の大事な契機を示すものである。

接続詞のあいまいな文章は、論理不鮮明な文章である。私どもが児童を、理のよく通る文章表現法にみちびこうとすれば、その接続詞用法のたんれんをやらなくてはならない。

これもまた、有形の接続詞をおくことばかりにこだわってはならない。無形空白の接続詞でもよい。文から文への、文脈の展開の、角度・ふれを調節させることにすればよいわけである。

話しことばには、どんな接続詞があるか。人はまたどんなにこれを創作しつつあるか。このような注意のもとに、児童の自由な接続表現を善導していく。存外、大人の方が、かぎられた接続表現法に手ぜまな思いをしてはいないか。

接続表現の指導としては、一段落からつぎの段落へのわたしこみに留意させることも大事である。その人の論理上の精確度は、自然にここに流露する。ここをきたえることが、大すじの論理性の教育になる。

話す場合には、段落をつぎの段落へ展開するうえの用意などが、ことにうすくなる。そこに出てきがちの不用意な文句は何であるか。その個人的な習慣などを打破しなくてはならない。

○む　す　び

以上は、かぎられたことで、いちおうの理的たんれん、理のたんれんを述べてみたのにとどまる。

今日明日の理想の人格は、どのようなものであるか。そのために国語教育のいとなむべき任務は、どんなことであろう

理想の人格に、『理』の精神がとおっていなくてはならないことは、明らかであろう。とすれば、『理』の教育の重要なことは明らかであり、『理』の国語教育もまた要請されることになる。（二七・一二・一六）